

陳舜臣さんを語る会通信

NO.42

Jul.

2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年7月20日

16世紀半ば、北虜南倭に揺れる明国と 大内、尼子、毛利、陶ら西国の大名、武将が争う日本が舞台『戦国海商伝』

初出は、産経新聞、1988年8月15日～89年9月15日朝刊連載です。単行本では講談社(1990年)があり、文庫版では講談社文庫(1992年)があります。ところで、新聞連載時の題名は「天外の花」でした。

下の枠内は、集英社『陳舜臣中国ライブラリー20』「自作の周辺」を中心に、一部、文庫版『戦国海商伝』「あとがき」からの抜粋引用です。
(編集委員 橘雄三)

新聞連載時の題名は「天外の花」

この作品は、産経新聞連載時は「天外の花」という題名だったんです。

「天」は、天下というのを意識したんです。天下は、権力者に支配されているところ。つまり陸地ですね。海は、その支配の外にある。海は天の外という感じなんです。そこには、ときの権力に縛られないで、自由に生きている人たちがいます。そんな人びとを登場させる海洋小説のつもりで、そう命名したんです。

それと、もっとロマンスというか、恋愛描写を多くするつもりもあって、「花」を付けた。そういうことだったんですけれども、書いていくうちに、海商活動のほうにウエイトが行っちゃいましたね、また当時、文字は異なるが、発音すればまぎらわしい本が出たので、思い切って改題したんです。

「戦国」というのは、日本の戦国時代のことです。日本の戦国武将たちは、明との交易によって、かなり

潤っていたのです。

歴代の中国がそうなんです。通商というのは朝貢の形をとるんですね。あのころも足利将軍が日本国王ということで、明王朝に朝貢を願ひ出て、その許可証である勘合をもらう。日本の武將らは、それを自分が仕立てた通商船に持たせて明に派遣するんです。

彼らはいちおう足利幕府から派遣された公式の使節ですから、しかるべき朝貢品を北京の朝廷に献上する。そして、その見返りに何倍もの下賜品を手にする。でも、それだけではないんですね。朝貢品のほかにいろんな物産を日本から持ち込んで、入港地の寧波や北京への往來の途中なんかで交易します。この利益が大きかったんです。

倭寇の頭目、王直

倭寇といっても、実際のボスは向こうの貿易商です。そこに加わっている日本人は、だいたい十のうち二、三ぐらいですね。日本人と中国人の連合体であることは間違いないけれど、倭寇の頭目である王直は新安の商人ですから、向こうの人です。しかし、日本の五島に根拠地を構えていたということは、その手下に日本人が多くいたということですね。



■右は平戸「歴史の道」の王直像。

海洋は自由なボーダーレスの世界

鄭成功を書いたときから、この作品の構想はあったんです。海禁の明の時代にも私貿易を通じて、日中間の交流、人の往來がいつばいあったんですね。で、鄭芝竜・成功親子より前の時期に遡って、このことを書こうと...

海商であれ倭寇であれ、自由に双方の人びとが往き来する。その世界が海なんですね。つまり、ボーダーレスの世界ですね。

これからはボーダーレスの時代です。パスポートはいらない世界が実現するといわれています。

■陳舜臣さんには、鄭芝竜を描いた『風よ雲よ』(一九七三年 中央公論社)と、鄭成功を描いた『旋風に告げよ』(一九七七年 講談社)があります。



単行本表紙

『戦国海商伝』時代背景と主な登場人物

[講談社文庫版『戦国海商伝』キャッチコピーより]

上巻 戦国乱世の日本。天下を狙う群雄が軍資金づくりの密貿易にはしっていたころ、中国には明朝打倒に燃える豪商の集団があった。彼らは水上生活者に身をやつし、倭寇と組んで着々勢力を扶植する。奇しき人生を生きる毛利の落し子の運命を軸に、中国と日本をむすぶ戦国の水脈を描く海洋歴史ロマン。

講談社文庫版(上)表紙 →



下巻 毛利元就の落し子佐太郎は、中国有数の豪商曾伯年から明朝打倒の支援を頼まれた。陰謀うずまく激浪のただなかに、いやおうなく引きこまれる海の男たちの宿命。国禁を破って活況をていする日明貿易の裏にうごめく影は？時代をつき動かす歴史のダイナミズムをとらえた激動の海洋大ロマン！

講談社文庫版(下)表紙 →



主な登場人物

■物語は、一五二三年、交易権をめぐる大内氏と細川氏が争った「寧波の乱」で始まり、一五五五年の「厳島の合戦」で終わる。舞台の多くは明国であるが、大内、尼子、毛利、陶など西国の大名、武将の勢力争いの記述が挟まれて物語は進み「厳島の合戦」で一つになる。

●立花佐太郎 主人公。父は堺の商人・立花玄島。七歳のとき「学問のため」、細川氏が仕立てた遣明船で明国へ。寧波に着くなり「寧波の乱」に遭遇、范欽にかくまわれる。以後、蘇州などで明国暮らしが続く。華佐律と名のる。

●入江信吉 安芸の国、入江の出身。毛利元就の小姓役を務めたことがあり、毛利第一で行動している。佐太郎より十六歳年長。既に、長く明に滞在。江新風と名乗っている。

●朝倉青峰 絵師。博多の出身。大内家が日本の覇者になることを熱望している。既に、明に長く滞在。

●祝一魁(しゅくいつかい) 佐太郎に棒術を教える。

●翠媛(すいえん) 父が死に、伯父・祝一魁の娘として暮らしている。一魁の棒術の助手。

●張銘(ちやうめい) しばしば日本に渡り、日本滞在の経験もある。佐太郎の学問の師。自由に日本語を話す。范欽の蔵書収集・購入を担当している。

●程籍(ていせき) 琉球出身。自由に日本語を話す。佐太郎に拳法を教えている。

●銭談(せんたん) 被差別集団、九姓漁戸。舟山の近く、桃花山の網元。

●若藻(じゃくそう) 銭談の娘。

●陶光(とうこう) 一線光とも称する。天気を読める。すぐれた船乗り。

●王直(おうちよく) 汪直とも。五峰と称する。実在の人物。貿易商人(海商)で、浙江省の舟山諸島を本拠地、日本の五島や平戸を拠点として活動する倭寇の頭目。

●范欽(はんきん) 号は東明。寧波の名家。進士。各地の長官を歴任し、国防次官で退任、蔵書楼「天一閣」を建てる。

●曾伯年(そうはくねん) 明国随一の富豪。福建泉州府、九日山にある別荘添花堂の主。明王朝から迫害された人々を糾合、王朝打倒の野望を持つ。

●慈姑(じこ) 蘇州の甘棠庵の庵主。曾伯年と佐太郎のつなぎ役と思えるが、自身の意思も感じられる。

●朱執(しゅがん) 江蘇省呉県の人。倭寇討伐に大きな戦果を上げたが、密貿易により利益を得ていた勢力の反感を買い、豪商らの画策によって弾劾を受け、憤って服毒死。

●俞大猷(ゆうたいゆう) 福建泉州府の人。倭寇を討つて功あり、明史に武名を残した名将。同作品では、祝一魁に棒術をならう。

●戚繼光(せきけいこう) 山東登州衛の人。倭寇鎮圧に勇名を馳せた。俞大猷と並び称せられる。

●嘉靖帝(かせいてい) 位一五二一〜一五六六。道教を狂信し日夜祭祀を行い、政治は大学士嚴嵩任せにする。

●嚴嵩(げんそう) 君寵をほしいままに政治を専断。賄賂政治をおこなう。

■「厳島の合戦」には、明国から来た唐船三艘が加わっていた。

乗組員は、銭談が指揮する桃花山党の面々である。

「佐太郎の船には、新吉と青峰が乗っている。

陶光の船には、祝一魁がいたし、銭談の船には程籍がいた。」

佐太郎人脈の総勢が集結し、ここに、毛利と陶の決戦の幕が切つて落とされる。



厳島合戦図 hikog.gokenin.com より

『戦国海商伝』いくつかの補足

《1. 新安商人とは》

新安商人の名は、古く、安徽省、浙江省の省界地方にあった新安郡に由来する。徽州商人ともいう。新安の名は、現在、新安江という川の名に残っている。新安商人は山西商人(山西省出身の商人集団)と勢力を競い合ったが、特に、両淮(淮河流域)の塩業を抑えてから急速に勢力を伸ばした。

新安地域には、墨、硯の産地として有名な歙県、紅茶で知られた祁門県などがある。新安は山間部であるが、船運を利用し、新安江、富春江、钱塘江と下り杭州に出ることができ、交通の便はすぐれていた。

商業活動の分野は、行商から大規模な貿易まで広がった。特に、貿易では、許棟、王直、徐海などがある有名である。

『曼陀羅の人』を扱った本通信No. 21で触れたが、

《2. 范邸の天一閣》

范欽(号は東明)は実在の人物である。



范邸の庭の范欽像

佐太郎は、寧波に着くなり「寧波の乱」に遭遇、范邸にかくまわれる。のち、蘇州に住むようになるが、住居は范氏の持ち家のようなだった。というように、范欽との親しい付き合いが続く。

范欽は進士に及第、各地の長官を歴任するが、蔵書楼をつくるという夢を持っていて、国防次官を最期に官を退く。

陳舜臣さんは、『戦国海商伝』で、「天一閣」という章を設け、「この寧波の范邸の蔵書楼を、国家法制化の研究所にするのが、范東明の宿願であった。」と記述している。陳さんの思い出が読み取れます。

「天一閣は現存し、いまは寧波市の重要な観光資源となっている。」



空海一行は、漂着した福建省から、山越えて浙江省に入り、上の地図の富春江を下り杭州に出ている。



「南國書城 天一閣」

この頁、画像は全て編集委員の撮影



「天一閣」主屋 ↑

「珍本、善本数は七万余巻、空前のコレクションである」 書棚 →



